

桑山君を偲ぶ

文學部講師 小西四郎

桑山君は、私にとつて非常に印象の深い學生の一人であつた。桑山君は、かなりエクセントリックな性格のように思えた。それだけに私の注意をひいたのかも知れない。青白いような顔、憂鬱そうな顔、その中にまた一種の精悍な何物かを持ち、氣概に満ちた闘志を藏しているようだつた。だから私は、桑山君が、朗らかに談笑しているというような姿をほとんど知らない。といつて、決して人づきあいが悪いというのではなく、學友からも信頼され、クラスの行事では何時も先頭に立つて世話をやいていた。勉強もよくしていたようである。私は専門の關係から、直接その卒業論文などの指導に當らなかつたが、眞面目な態度で問題にとりこんでいた。東大の史料編纂所にも、よく顔を見せていた。静岡縣下の二泊見學旅行や、二年間の學校での接觸など、さまざまのことを思い出すにつけ惜しい人物を失つたと思う。愛し子を失われた御父君や、肉親の方々の御悲嘆は、さぞかしくと拜察する。私としても、若い有望な教え子を失つた憾みは誠に深い。

桑山君のノートから

文學部助手 藤井秀夫

駒澤大學に於ける桑山良晃君の學業は、擧げてその卒論に結集されている。又その研究態度は、本學の諸先生の御追想に總てが述べ盡されている。そこで私はこの限られた紙數の本書に一々掲載して紹介する事が出来なかつた同君の多くのノートから二、三取り上

げて、故人の人となりを追想する事にした。桑山君は明らかに自學自習の型に屬する學生であつた。どの授業のノートを見ても、その儘速記した物ではない。インクの違つている点、而も項目別に纏められてある点から、恐らく教室では師説の要旨をその場で纏め而も後日参考文献を見ながら、自分で作り上げたものと思はれる。従つてそのノートは内容に富み、而も完全に整理されたものである。桑山君のこうしたノートの整理の仕方は、自分の必要とする方向の學習には一層の積極性を示している。その一例として古文書學のノートが擧げられる。玉村先生も述べられているが、禪宗史の卒論を夙に決意した同君は、先づその基礎的學習として、古文書學の知識を切實に感じたのであつたろう。彼は一週一講座の古文書學の受講に止まる事なく、進んで黑板勝美博士の虛心文集第五、第六を逐章、書き抜いて一小冊子を作り、座右に備えていた。終戦後幾何も經ない當時は、特に古書が手に入り難い時世であつた爲でもあらうが、あの老大な書物を丹念に筆写した情熱は、そう他に求められるものではあるまい。次で述べておかなければならないのは、卒業后而も恐らく遭難日に近い月日のノートに、「日本禪宗史講義腹案」、「日本史講義案」と云う未完の二冊を見出す事である。前者は卒論を反省し更にその展開を期せうとした物であり、後者は高等學校教員を志望していた遭難當時の事から推して、その曉には、如何に日本史を講義するかを眞面目に考えて、構想を練つていたノートと考えられる。而もその何れもが、洞爺丸船中より遺品として上げられたと云う事は、同君の生活が常に史學研究を念頭において組み立てられていたと想はれ、この点洵に哀悼の情に忍び難い。御尊父より承る處によると、桑山君は家人に誘はれても散歩に出る事もなく、机に